

## 第4問

次の文章は『源氏物語』「手習」巻の一節である。浮舟という女君は、薫という男君の思い人だったが、匂宮という男君から強引に言い寄られて深い関係になった。浮舟は苦悩の末に入水しようとしたが果たせず、僧侶たちによって助けられ、比叡山（ひいざん）のふもとの小野（おの）の地で暮らしている。本文は、浮舟が出家を考えつつ、過去を回想している場面から始まる。これを読んで、後の問い（問1～5）に答えよ。（配点 50）

あさましようもてそこなひたる身を思ひもてゆけば、宮を、すこしもあはれと思ひ聞こえけむ心ぞいとけしからぬ、ただ、この人の御ゆかりにさすらへぬるぞと思へば、小島（こじま）の色を例（たと）に契り給ひしを、（注2）などてをかしと思ひ聞こえけむとこよなく飽（あ）きたる心地す。はじめより、薄（うす）きながらものどやかにものし給ひし人は、この折（ま）かの折など、思ひ出づるぞこよなかりける。かくてこそありけれと聞きつけられ奉らむ恥づかしさは、人よりまさりぬべし。さすがに、この世には、ありし御さまを、よそながらだに、いつかは見むずるとうち思ふ、なほわろの心や、かくだに思はじ、など、（注3）心ひとつをかへさふ。

からうして鶏（とり）の鳴くを聞きて、いとうれし。母の御声を聞きたらむは、ましていかならむと思ひ明かして、心地もいとあし。（注4）供にてわたるべき人もとみに来ねば、なほ臥し給へるに、いびき（いびき）の人はいとく起きて、粥（か）などむつかしきことどもをもてはやして、「御前（おまへ）に、とく、聞こし召せ」など寄り来て言へど、まかなひもいと心づきなく、うたて見知らぬ心地して、「なやましくなむ」と、ことなし給ふを、強（し）ひて言ふもいとこちなし。（注5）下衆下衆しき法師ばらなどあまた来て、「僧都（そうず）、今日下りさせ給ふべし」、「などにはかには」と問ふなれば、「二品の官の御物の怪（け）になやませ給ひける、山の座主御修法（ざすおほり）仕まつらせ給へど、なほ僧都参り給はでは験（しる）なしとて、昨日二たびなむ召し侍りし。右大臣殿の四位少将、昨夜夜更（よる）けてなむ登りおはしまして、後の官の御文など侍りければ下りさせ給ふなり」など、いとほなやかに言ひなす。恥づかしうとも、あひて、尼になし給ひてよと言はむ、（注7）さかしら人すくなくてよき折にこそと思へば、起きて、「心地のいとあしうのみ侍るを、僧都の下りさせ給へらむに、忌むこと受け侍らむとなむ思ひ侍るを、さやうに聞こえ給へ」と語らひ給へば、ほけほけしうなづく。（注8）

例の方におはして、髪は尼君のみ梳り給ふを、別人に手触れさせむもうたておほゆるに、手づから、はた、えせぬことなれば、ただすこしとき下して、（注9）親にいま一たびかうながらのさまを見えずなりなむこそ、人やりならずいと悲しけれ。いたうわづらひしけにや、髪もすこし落ち細りにたる心地すれど、何ばかりもおとろへず、いと多くて、六尺（むさし）ばかりなる末などぞうつくしかりける。筋なども、いとこまかにうつくしげなり。「かかれとてしも」と独りこちあ給へり。（注10）

（注） 1 宮——匂宮。

2 小島の色を例に契り給ひし——匂宮に連れ出されて宇治川のほとりの小屋で二人きりで過ごしたことを。

3 薄きながらものどやかにものし給ひし人——薫のこと。

4 供にてわたるべき人——浮舟の世話をしている女童。

5 いびきの人——浮舟が身を寄せている小野の庵に住む、年老いた尼。いびきがひどい。

6 僧都——浮舟を助けた比叡山の僧侶。「いびきの人」の子。

7 忌むこと受け侍らむ——仏教の戒律を授けてもらいたいということ。

8 例の方——浮舟がふだん過ごしている部屋。

9 尼君——僧都の妹。

10 六尺——約一八〇センチメートル。

問1 傍線部A「心ひとつをかへさふ」とあるが、ここでの浮舟の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 1。

- ① 句宮に対して薄情だった自分を責めるとともに、現在の境遇も句宮との縁があつてこそだと感慨にふけっている。
- ② 句宮と二人で過ごしたときのことを回想して、不思議なほどに句宮への愛情を覚え満ち足りた気分になっている。
- ③ 薫は普段は淡々とした人柄であるものの、時には句宮以上に情熱的に愛情を注いでくれたことを忘れかねている。
- ④ 小野でこのように生活していると薫に知られたときの気持ちは、誰にもまして恥ずかしいだろうと想像している。
- ⑤ 薫の姿を遠くから見ることすら諦めようとする自分を否定し、薫との再会を期待して気持ちを奮い立たせている。

問2 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 2、4。

- (ア) 聞こし召せ 2
- ① お起きなさい
  - ② 着替えなさい
  - ③ お食べなさい
  - ④ 手伝いなさい
  - ⑤ お聞きなさい
- (イ) こちなし 3
- ① 気が利かない
  - ② 大げさである
  - ③ 優しくない
  - ④ 気詰まりだ
  - ⑤ つまらない

- (ウ) さかしら人 4
- ① 知ったかぶりをする人
  - ② 口出しする人
  - ③ 身分の高い人
  - ④ あつかましい人
  - ⑤ 意地の悪い人

問3 この文章の登場人物についての説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 5。

- ① 浮舟は、朝になつても気分が悪く臥せつており、「いびきの人」たちの給仕で食事をする気にもなれなかった。
- ② 「下乗下乗しき法師ばら」は、「僧都」が高貴な人々からの信頼が厚い僧侶であることを、誇らしげに言い立てていた。
- ③ 「僧都」は、「一品の宮」のための祈禱を延暦寺の座主に任せて、浮舟の出家のために急遽下山することになった。
- ④ 「右大臣殿の四位少将」は、「僧都」を比叡山から呼び戻すために、「後の宮」の手紙を携えて「僧都」のもとを訪れた。
- ⑤ 「いびきの人」は、浮舟から「僧都」を呼んでほしいと言われても、ほんやりした顔でただうなずくだけだった。

問4 傍線部B「親にいま一たびかうながらのさまを見えずなりなむこそ、人やりならずいと悲しけれ」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 「かうながらのさま」とは、すっかり容貌の衰えた今の浮舟の姿のことである。
- ② 「見えずなりなむ」は、「見られないように姿を隠したい」という意味である。
- ③ 「こそ」による係り結びは、実の親ではなく、他人である尼君の世話を受けざるを得ない浮舟の苦境を強調している。
- ④ 「人やりならず」には、他人を責める浮舟の気持ちが込められている。
- ⑤ 「……悲しけれ」と思ひ給ふではなく「悲しけれ」と結ぶ表現には、浮舟の心情を読者に強く訴えかける効果がある。

問5 次に掲げるのは、二重傍線部「かかれとてしも」に関して、生徒と教師が交わした授業中の会話である。会話中にあらわれ

る遍昭の和歌や、それを踏まえる二重傍線部「かかれとてしも」の解釈として、会話の後に六人の生徒から出された発言

①～⑥のうち、適当なものを二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 

7	・	8
---	---	---

。

生徒 先生、この「かかれとてしも」という部分なんですけど、現代語に訳しただけでは意味が分からないんです。どう考えたらいいですか。

教師 それは、  
たちねはかかれとてしもむばたまの我が黒髪をなでずやありけむ

という遍昭の歌に基づく表現だから、この歌を知らないと分かりにくかっただろうね。古文には「引き歌」といって、有名な和歌の一部を引用して、人物の心情を豊かに表現する技法があるんだよ。

生徒 そんな技法があるなんて知りませんでした。和歌についての知識が必要なんですな。

教師 遍昭の歌が詠まれた経緯については、「遍昭集」という歌集が詳しいよ。歌の右側には、

なにくれといひありきしほどに、仕まつりし深草の帝隠れおはしまして、かはらむ世を見むも、堪へがたくか  
なし。藏人の頭の中將などいひて、夜昼馴れ仕まつりて、「名残りなからむ世に交じらはじ」とて、にはかに、家  
の人にも知らせで、比叡に上りて、頭下ろし侍りて、思ひ侍りしも、さすがに、親などのことは、心にやかか  
り侍りけむ。

と、歌が詠まれた状況が書かれているよ。

生徒 そこまで分かると、浮舟とのつながりも見えてくる気がします。

教師 それでは、板書しておくから、歌が詠まれた状況も踏まえて、遍昭の和歌と「源氏物語」の浮舟、それぞれについて  
みんなで意見を出し合ってください。

① 生徒A——遍昭は、お仕えしていた帝の死をきっかけに出家したんだね。そのときに「たちね」、つまりお母さんのことを思って「母はこのように私が出家することを願って私の髪をなでたに違いない」と詠んだんだから、遍昭の親は以前から息子に出家してほしいと思っていたんだね。

② 生徒B——そうかなあ。この和歌は「母は私がこのように出家することを願って私の髪をなでたはずがない」という意味だと思ふな。出家をして帝への忠義は果たしたけれど、育ててくれた親に申し訳ないという気持ちもあって、だから「遍昭集」で「さすがに」と言っているんだよ。

③ 生徒C——私はAさんの意見がいいと思う。浮舟も出家することで、遍昭と同じくお母さんの意向に沿った生き方をしようとしているんだよ。つまり、今まで親の期待に背いてきた浮舟が、これからの人生をやり直そうとしている決意を、心の中でお母さんに誓っていることになるね。

④ 生徒D——私も和歌の解釈はAさんのでいいと思うけど、「源氏物語」に関してはCさんとは意見が違う。薫か匂宮と結ばれて幸せになりたいというのが、浮舟の本心だったはずだよ。自分も遍昭のように晴れ晴れした気分では出家できたらどんなにいいかという望みが、浮舟の独り言から読み取れるよ。

⑤ 生徒E——いや、和歌の解釈はBさんのほうが正しいと思うよ。浮舟も元々は気がすすまなかった、親もそれを望んでいない、それでも過去を清算するためには出家以外に道はないとわりきった浮舟の潔さが、遍昭の歌を口ずさんでいるところに表れているんだよ。

⑥ 生徒F——私もBさんの解釈のほうがいいと思う。でも、遍昭が出家を遂げた後に詠んだ歌を、浮舟は出家の前  
思い起こしているという違いは大きいよ。出家に踏み切るだけの心の整理を、浮舟はまだできていないということが、  
引き歌によって表現されているんだよ。